

全ての人が安心して生きられる社会を

～私にできること、私たちにできること～

私たちが生きる社会は、全ての人のために安心して生きることができる社会となっているでしょうか。

戦後80年の日本において、平和であることが多くの人にとって当たり前のことになっているかもしれませんが、しかし、世界各地では武力紛争が絶え間なく続き、平和に暮らすことや、命が守られることが当たり前ではない現実があります。一方、私たちが暮らす社会においても、差別や偏見などの様々な要因で安心して生きることを阻まれている現実があります。

「あけぼの」39号では、戦争の記憶を風化させないために、戦争体験を語りつなぐ活動をする高校生の思いや、祖国での武力紛争により身近な人を亡くした経験を通して、平和を願う中学生とその家族の思いを紹介します。また、難病と向き合いながら生きる自分自身の経験を通して、難病患者や障がい者、その家族を支援する活動をしている人やその家族の思いを紹介します。

今回紹介させていただく人の思いや願いを通して、私たちが生きる社会が、全ての人のために安心して生きることができる社会となるよう、私にできること、私たちにできることを考えるきっかけにしたいと思います。

残された言葉に思いを馳せて ～津市香良洲歴史資料館を見学して～

「この若者たちの命が、戦争という行為によって奪われたのだ」

予科練生たちの写真を前に、私の中には憤りと切なさがこみ上げてきました。

香良洲町には、昭和17年から終戦までの3年間、三重海軍航空隊が置かれていました。そこでは、航空機搭乗員を育てるため、14歳から20歳までの若者に「予科練」と呼ばれる教育と訓練が行われていました。こうした歴史的な事実と、寄贈された貴重な資料が展示されているのが津市香良洲歴史資料館です。



【津市香良洲歴史資料館】

資料館には「三重海軍航空隊」や「平和への歩み」等、5つのテーマ別に様々な資料が展示してありました。その一つ一つを見ていると、当時の社会状況や、予科練生とその家族の思いが浮かんでくるようでした。

3階にある「遺品室」の入り口には、「時代に翻弄され、戦争に飲み込まれていった若者たち、残された家族。遺品からそれぞれの思いをたどります」と書かれ、戦争で命を落とした予科練生の写真、予

科練生と家族との手紙や特攻隊員の遺書等が展示されていました。

ある予科練生が家族に宛てた手紙がありました。故郷から届いた小包に、母の



【3階展示室「遺品室」】

筆跡を見つけて故郷を懐かしんだことや、自分が戦場に向かう時が迫っていることが綴られていました。ある特攻隊員が家族に宛てた遺書もありました。その遺書は「泣かずに誉めてくださいね」という言葉で締めくくられていました。

「この手紙の一言一言を、どのような思いで書いたのだろう」「残された家族はどのような思いで読んだのだろう」若者の手紙の一文字一文字を見ながら、そのようなことを思うと、胸が締め付けられる思いがしました。

資料館にある一つ一つの展示を見学して、改めて、誰もが安心して自分らしく生きることができる社会をつくりたいと思いました。

【開館時間】 9時～17時(入館は16時まで)
【休館日】 月曜日(月曜日が祝・休日の場合はその翌日)
12月28日～1月4日
【入館料】 無料
【所在地】 津市香良洲町 6320

私たちにできること、それは「語りつなぐ」こと

津西高校放送部のみなさんは、戦争をテーマとした短編ドキュメント「無関心」(令和6年度)「無関心2」(令和7年度)を制作し、NHK 放送コンテストにも出品しました。

今回は、放送部のみなさんから、制作を通して感じた、自分たちにできることや、一人の人として自分にできることを聞かせていただきました。

私たちにできること ～放送部の活動を通して～

昨年、学校の平和学習で、津市の空襲を経験された亀井カノンさんから話を聞かせていただきました。それをきっかけに、放送部でも戦争をテーマとした作品制作に取り組みました。

私たちは、その作品を昨年8月に開催された「津平和のための戦争展」で上映しました。それをご覧になった高齢の方が、私たちにご自分の戦争体験を話してくれました。まるで昨日の出来事かのように鮮明に話され、聞いている私たちが耳をふさぎたくなるほど恐ろしい話でした。思い出すのもつらいことを私たちに語ってくれるその姿に、「戦争は二度と繰り返してはいけない」と強く思いました。そして、この人たちの思いを聞いた私たちが「戦争の記憶を語りつないでいかなければならない」と感じました。

今年度も、戦争についてもっと知りたいと思い、戦争についての展示をしている津市香良洲歴史資料館を見学したり、戦争を体験された人の思いを聞いたりしました。その中で、私たちの暮らす地域に戦争に関わる記録があることを知るとともに、子どもの頃、家族を戦争に送り出した人の経験を聞くことで、私たちは、戦争をさらに身近に感じるようになりました。

この2年間の活動は、私たちが大切にしなければいけないものは何かを考えるきっかけになりました。これからも私たちは、戦争の悲惨さや、戦争を体験された人たちの願いを私たちにできる方法で発信していきたいと思います。

一人の人として、私にできること

子どもたちが当たり前で笑っている社会をつくりたいです。そのために、まずは自分の地域で子どもたちのために開催されるイベントに、ボランティアとして参加しています。

今起こっている戦争で、子どもたちがどのような思いをしているのか考えるようになりました。私は、戦争について、もっと自分事として考えていきたいと思っています。

周りに流されず、おかしいと思ったことはちゃんと伝えていきたいです。そのことが、身近ないじめだけでなく戦争をなくしていくことになると思います。

戦争の悲惨さや、平和に対する思いや願いを、多くの人に知ってもらいたいため、放送部の活動を通して発信していきたいです。

自分のことを大切に、人生を楽しんで生きていきたいと思っています。

自分が暮らす地域で、戦争中、何が起こったかもっと知りたいです。身近な地域について知ること、当時の戦争に思いを巡らせたり、家族や友人と戦争や平和について話したりする機会がもっと増えると思うからです。



全ての人が

安心して生きられる世界に



【ナタリヤさん】

【アンジェリナさん】

中学生のキット アンジェリナさんと母のナタリヤさんは、津市で暮らして10年以上になります。ナタリヤさんの弟は祖国ウクライナでの武力紛争により命を落としました。そのことを通して自分の経験や思いを綴ったアンジェリナさんの作文は、令和6年度全国中学生人権作文コンテストで法務省人権擁護局長賞に選ばれました。今回は、アンジェリナさんとナタリヤさんからお話を伺いました。

～自分の思いを伝えていきたい～ キット アンジェリナさん

2022年、ウクライナで戦争が始まりました。私たちは日本で平穏に暮らしていましたが、祖国での戦争をいつも心配し、不安な気持ちでいっぱいでした。

そんなある日、ウクライナで暮らす叔父が、戦争で命を落としたと連絡がありました。私は、その時のことを決して忘れることができません。

人間は幸せな人生を送るために生まれてきたはずなのに。戦争では次々に命が奪われていく。破壊された家にも町にも、そこに暮らしていた人たちの思い出があったはずなのに。戦争で奪われたものは取り戻すことができない。兵士になって戦争に行く人たちも、本当は怖いだろうし、戦争になんて行きたくないと思っても、そんなことも言えなくなる。戦争は絶対に許せない。

私は、叔父や母のことを通して、ずっと抱えていた様々な思いや不安を学校で友だちに話した。みんなは、真剣に私の思いを聞いてくれた。そんなみんなの姿を見て、私は、ここにいるみんなも平和を願う気持ちは一緒なんだと感じ、自分の思いを話してよかったと思った。私はこれからも自分の思いを伝えながら、全ての人が安心して生きられる社会をつくっていききたいと思う。

～今の私にできること～ キット ナタリヤさん

弟が戦争で亡くなったとき、私は、あまりのショックで朝まで泣き続けました。深く傷ついた私たちは、しばらくその話をすることはできませんでした。

ある日、アンジェリナがその時のことを尋ねてきました。私は「何で、あんな悲しい出来事を思い出させるようなことを聞くの」と思いました。後日、アンジェリナの学校の先生から連絡をもらい、アンジェリナが自分の経験や思いを作文に書いたことを教えてもらいました。その作文を初めて読んだとき、私は涙が止まりませんでした。それは、アンジェリナが傷ついた私を支えようとしていること。そして、自分の経験や思いを伝え、仲間とともに全ての人が安心して生きられる社会をつくる生き方をしようとしていることを知り、私が勇気づけられたからです。

戦争は、大切な人の命だけでなく、私たちが生まれ育った町、私が生きていた人生、家族と共に過ごしてきた大切な時間を奪っていきます。私は、人の命を奪い、人生を奪っていく戦争が許せない。

戦争がない平和な世界を実現することは、私だけでなく世界中の人の願いだと思う。私は、私の思いを伝え、周りの人たちと力を合わせることで、全ての人が安心して生きることができる社会をつくっていききたい。それが今の私にできることだと思うから。

シリーズ 人・ひと

今回は、難病に向き合いながら、全ての人が安心できる地域社会をつくろうと活動している、市内在住の三行正晃さんを紹介します。そんな三行さんの姿を通して感じていることを綴った三行穂乃芽さんの作文は、令和6年度全国中学生人権作文コンテストで法務事務次官賞に選ばれました。



【三行穂乃芽さん】

【三行みのりさん】 【三行正晃さん】

穂乃芽さんにとって お父さんはどのような存在ですか

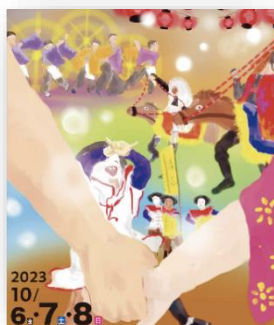
父は、明るくユーモアにあふれ、私たち家族にとっての誇りです。私は、小さい頃から一緒に暮らしてきたので、「ミオパチー」という病気が、父から日常の当たり前を次々に奪い、他者の助けなしには生活できなくなっていく現実を受け入れていました。でも、普段は明るい父が、自ら命を絶とうと考えるほど葛藤していたことや、母の一言が父を救ったことは知りませんでした。その話を初めて聞いた時は、「父が生きていてくれて本当に良かった」と思いました。

正晃さんは、穂乃芽さんの作文を どのように感じましたか

娘が通っている学校から頼まれ、私の経験や思いを中学生に話すことになりました。自ら命を絶とう考えるほど葛藤していたことは、今まで娘に話したことがなかったので、最後まで話すかどうか迷いました。だから、穂乃芽が「お父さんの思いを知れてよかった」と感じていることや「誰もが過ごしやすい社会をつくりたい」という強い思いを持っていることを知れて嬉しかったです。

津まつりのポスターを 描かれたきっかけは何ですか

それは、妻の「描いてみたら」という一言です。これまでも、妻から提案され、穂乃芽の妹が保育園で誕生会があったときなどに、絵を贈ったこともありましたが。日々の生活の中で目標を見出しにくい私にとって、誰かのために絵を描くことが一つの目標になっていきました。



私の絵が津まつりのポスターに選ばれ、取材を受けた時には、病気のことも取り上げられました。それから、娘が通う中学校で話をする機会をもらいました。その後、穂乃芽の作文が取り上げられ、これまで交流のなかった人たちや地域の子どもたちとのつながりが生まれています。絵を描くことをきっかけに人とつながることで、世の中とつながっていると感じます。これからも、手を動かせる間は、ずっと絵を描き続けていきたいです。

全ての人が安心して生きられる社会をつくる ために取り組んでいることはありますか

私は、障がい者に対するサービスのモニタリングに参加しています。外出先で感じたことや困ったことを発信することで、私たちの病気や障がいを知ってもらうことになると思うからです。

「ミオパチー」という病気も、私たちが発信しなければ、ほとんどの人に知られていないと思います。私たちの世代で病気を克服できなくても、自分たちがモデルケースになることで、同じような病気で苦しむ子どもたちの苦しみを少しでもやわらげることにつながっていると思っています。だから、絵を描くことや、所属する NPO 法人「ぷてい・ぼぬーる」のイベントに参加することで、そこで出会った人たちに、「私」を通して何かを感じてもらえればと思っています。

(正晃さん)

私もボランティアとして父の活動に参加し、そこで出会えた人たちに父の障がいや病気について伝えています。障がいとは、障がい者が健常者と同じように自由に生きることができないような社会のしくみの中にあると思います。だから、私も父と一緒にそのような活動に参加することで、全ての人が安心して生きられる社会をつくっていききたいと思っています。

(穂乃芽さん)